

京都の大学生が
牟岐町の防災
について
インタビュー

なによりも

大切なもの

僕らと一緒に、みんな生きてほしい

自然が美しいこの町で
豊かな人の営みがあるこの町で
「みんなで、生きてほしい」と願う、若者からの熱いメッセージを
京都産業大学 木原ゼミの
学生がインタビューで届けます。



やってほしい防災対策 牟岐町の役場のみなさんに聞いてみました！

■ 災害時の時どうするか家族で話し合う機会を設けよう
避難場所や避難経路をどうするかを話し合うだけでなく、実際に自分の目で確認し、危険箇所等チェックしましょう。別々の場所にいる時に災害が発生した場合でもお互い安否確認ができるよう、日頃から安否確認方法や集合場所などを事前には話し合っておきましょう。
・災害用伝言ダイヤルを利用しよう。 局番なしの「171」
・災害用伝言板を利用しよう。



■ 食料・飲料などの備蓄をしよう
電気やガス、水道などのライフラインが止まった場合に備えて普段から飲料水や保存食を備蓄し、トイレを流したりするための生活用水を確保するため水道水を入れたポリタンクやお風呂の水をいつも張っておくなどの備えをしておきましょう。



■ 自宅で家具類の転倒・落下・移動防止対策をしよう
大地震発生の際に家具が転倒することで下敷きになり大けがをし、最悪の場合は命を落とす可能性もあります。日頃から転倒防止策を講じ、家具が転倒しないよう転倒防止をしましょう。また、部屋に閉じ込められないよう家具の配置を見直し、古い家屋ではガラス飛散防止フィルムを貼るなど、屋内での避難ルートを確認しましょう。

■ 非常用持出袋の準備をしよう
大地震発生時、避難所や安全な場所に避難して生活をする可能性があります。非常時に持ち出すものをあらかじめリュックサックに詰めて、いつでも持ち出せる準備をしましょう。すでに準備している人も、賞味期限や器具の使用の有無を確認しておきましょう。

首相官邸ホームページ「災害に対するご家庭での備え〜これだけは準備しておこう!〜」についてもご覧ください。



■ 寝ている時でも早急に避難ができる準備をしよう
就寝時に素早く避難できるよう、避難に必要な物を手の届く範囲に備えておきましょう。牟岐町では約11分で津波が到着すると予測されています。
例) 懐中電灯、履物、ホイッスル、携帯電話、眼鏡、非常用持出袋など

編集後記



山岡 美里
中学生の方が真剣に防災活動に取り組んでいる姿、素晴らしいと感じました。また、牟岐町で防災活動をする皆さんのお話を聞いて、自分自身や自分の住む地域の防災について考える良い機会にもなりました。

大河内 千春
上田先生、久君、中学生5人のインタビューを通して、防災に対する熱い気持ちが伝わってきました。特に中学生がこんなに真剣に取り組んでいる姿を見て、自分ももっと防災について考えなければいけないと感じました。近々起きるとされている南海トラフ地震に向けて、この記事が少しでも読んでくださった方の防災に対する考え方を刺激できたなら幸いです。

井原 明彦
大人でも防災対策をやっていない人が居るのに、中学生で自分の町の防災を考えている事はすごい事です。彼らの牟岐町を災害から守りたいという気持ちがインタビューでも伝わってきました。災害があまり来ない京都に住んでいる私達も改めて防災対策の大切さがわかりました。

野田 康介
今回、上田先生や中学生にインタビューをしてみんなが牟岐の風景や人のことが大好きだということがとても伝わってきました。その思いをこの新聞で牟岐の人に少しでも伝えることができたのなら幸いです。

総括

自分の身の周りで「失いたくないもの」というと、思い浮かべるのは何でしょうか。家族や友人などの親しい人、今まで当たり前で過ごしてきた日常、地域の伝統や文化など、人によって様々です。しかし災害はこれらを一瞬で破壊してしまいます。昭和南海地震の際は、多くの家屋が破壊され、多くの人が犠牲になり、被害がひどかった地域では復興工事後に地

区の名称を改称したところもありました。津波に対する恐怖は、普段生活していて感じる事はおそらくほとんどないでしょう。しかし、自分の大切なものが津波によって失われてしまうかもしれないと考えると、必然的に恐怖を感じます。今この記事を読んでくださっているあなたが、津波の恐怖を感じてもらい、日頃から防災意識を持ち、災害が起こった際は、すぐに避難してくださることを心から願います。
(代表 大河内 千春)



かけがえのないものを守るために

■ まずは「知る」こと

上田好美（うえた よしみ）先生のインタビューを通して、津波の恐怖がありありと伝わってきました。

防災対策をしなかった場合に起こりうる危険性についてお聞きすると、1983年に秋田県沖の日本海で発生した日本海中部地震では、遠足の途中で立ち寄った海岸で小学生が津波に襲われ、13人という尊い命が失われたという悲惨な出来事をお聞きました。「日本海側には津波はこない」という言い伝えが現地にはあり、そうした誤った常識が被害を大きくしたとも言われています。そして昭和南海地震の時にも何人もの尊い命が津波により奪われてしまいました。その時に自宅の二階に避難して九死に一生を得た人の話を先生はしてくださり、その方は「地震が来たら津波が来ることを知らなかった。祖父や祖母からも聞かされていなかった。」と話されていたとのことでした。地震というのは頻繁には起こらず、次は世代を超えて起こることになります。そのため、語り継がなければ地震の恐怖や真実は伝わってきません。

今後発生する地震の被害を最小限にするためには、まずは正しい知識を知ることが大切であると感じました。

■ 南海トラフ巨大地震

近い将来発生するとされている南海トラフ巨大地震では大きな津波を伴うとされています。そしてその津波は、地震発生から約11分後には、牟岐町に到達し、町の中心部に被害を及ぼすことが想定されています。そのため地震が起きた時、いかに早く避難できるかどうかで、生き残れるかが決まります。素早い避難ができるように防災リュックを準備しておくなどの日頃の備えが大切だとおっしゃっていました。

旧牟岐小学校前にある「大震潮記念碑（安政南海地震記念碑）」



「昭和南海地震直後（1946年）」
（出典：徳島地方気象台HP）



現在



牟岐町防災サークル
上田 好美先生

牟岐町の生まれで小学校の教員をされていた。退職後、牟岐町防災サークルを立ち上げ教え子だった子供たちや仲間とともに防災活動に取り組んでいる。



このQRコードを読み込むと「徳島県牟岐町 津波避難マップ」を確認することができます。

第1回

インタビュー
2020/6/18

牟岐町防災
サークルの
上田好美先生

■ 牟岐町防災サークル

防災意識は人によって差があります。牟岐町防災サークルは、町の人たちの防災意識の向上も目標のひとつです。教員をしていた経験から、小学生、中学生、高校生にも呼びかけ、防災について自由に学べる場をつくりたいとの思いで、設立されました。そして現在、子どもたちが一生懸命防災に関して取り組む姿は、大人の心を動かし、町の人の防災意識の向上に貢献しています。ある高校生は、中学生時代に研修で東日本大震災の被災地を訪問しました。彼は、防災に関して興味を持ち、津波の被害が起きた場合、復興の際、測量が必要不可欠であるため、来年から測量関係の仕事に就くそうです。上田先生はこの話をとても嬉しく思うと語ってくださり、私も、サークルの活動がその人の将来にも影響を与えるというこの話はとても印象深く、これからもこのサークルでの活動はかけがえのないものになるだろうと感じました。

■ 上田先生にとっての防災活動

上田先生が防災活動に取り組む理由は「大好きな牟岐町を守りたい」という思いからです。

そして、子どもたちが成長していく姿を見れることもとても嬉しいと話してくださいました。サークルの中学生が、今までの成果を発表する場で、大人顔負けの発表をしたことがあったそうです。

更に、この防災活動は自分自身のためでもあるとのことでした。防災活動を通してのさまざまな人との出会い、さまざまな体験。これらすべてがとても楽しく、自分を成長させていると話してくださいました。人のための活動は実は自分のためにもなっているというのは、とても素敵なことだと感じました。
（大河内 千春）

京都の大学生が オンラインでインタビュー

京都産業大学現代社会学部の木原ゼミでは、様々なプロジェクトを通じて社会課題を学んでいます。今年度は、一昨年から交流のある徳島県牟岐町で、防災に関する情報の聞き取り調査をして、記事にまとめることに挑戦しました。当初は、現地でのフィールドワークを予定していましたが、新型コロナウイルスの感染拡大により現地訪問を断念。すべての活動をオンラインで実施することになりました。取り組んだのは、京都産業大学の3名のゼミ生と、徳島県出身で現在京都市内の大谷大学で学ぶ1名。出身地も様々です。南海トラフ地震に関する知識も防災教育を受けた経験も少ないメンバーが、いつか、いざという時に牟岐町の役に立てるのではないかと「よそ者目線」で南海トラフ地震について考え、学びました。

この夏、牟岐町の防災サークルで活動する皆さんに3回にわたって行ったインタビューをお届けします。

災害から守るもの

第2回

インタビュー
2020/8/9

牟岐町防災
サークルのリーダー
久京聖くん

■ 自分の命をまず大切に



地域の方と交流する様子

牟岐町防災サークルで活動している久京聖（ひさきょうせい）君は、サークルのリーダー的存在です。

中学生ながら、我々のインタビューに積極的に答えてくれましたが、その中でも、一番印象に残ったのが「自分の命をまず大切に」という言葉です。ただ自分の命が助かったら良いという事ではなく、牟岐町すべての人が助かってほしいという意味も込められているように感じました。

■ 活動で得たもの

久君が防災サークルに入ったのは、小学生の時に担任だった上田先生や防災の語り部さんに影響を受けたから。それ以来、上田先生の元で、防災キャンプや、語り部さんからの話を聞くなどの様々な活動をしてきました。防災の語り部

を聞いているからこそ、より津波の恐ろしさは知っています。「昭和南海地震の際、牟岐町はとても大きな被害を受けたので、次はそんな被害が出ないようにしたい。」と防災に対する思いも高く、防災サークルに入ってから、ハザードマップで浸水箇所を確認したり、家族と避難場所や津波の到達地点を確認しているそうです。何より家族と防災に関する会話が増えたことによって、家族全員の防災意識が高くなったと答えてくれました。

このように防災に積極的に取り組んでいる久君ですが、「牟岐町には多くの高齢者が海に面している



京都産業大学
現代社会学部
木原ゼミ3年
大河内 千春
（富山県高岡市出身）



京都産業大学
現代社会学部
木原ゼミ3年
井原 明彦
（兵庫県姫路市出身）



京都産業大学
現代社会学部
木原ゼミ2年
山岡 美里
（京都府向日市出身）



大谷大学
社会学部2年
野田 康介
（徳島県那賀町出身）

インタビューには、京都産業大学現代社会学部2年岡田和佳奈（第1回・第3回）、岡清水敬司（第2回）、徳島大学総合科学部3年大喜田美咲（第2回）も参加しました。



防災キャンプで食事を作る中学生達

印象に残っています。」と話してくれました。同じく防災デイキャンプが印象に残ったと話してくれた元木君は、お昼ご飯を作った際に間鍋をしたということを教えてくれました。間鍋は様々な食材を入れて作ったけれど意外とおいしかったそうです。また、1000円くらいする非常食の牛丼を食べたこともあるそうで、「1000円するだけあってほんまにおいしかったです。」と笑顔で話してくれました。

防災デイキャンプ以外にも牟岐町防災サークルでは1泊2日のキャンプを行ったこともあるそうで、居村さんは「牟岐少年自然の家でみんなでキャンプをしたことが印象に残っています。」と話してくれました。

牟岐町防災サークルの一員として防災活動を真剣に行いながらも、楽しみながら活動している中学生達の様子が伝わってきました。



防災キャンプで食事を作る中学生達

防災に向き合う中学生達の想い

■ 楽しみながら学ぶ

3回目のインタビューに答えてくれたのは、久君と同じく牟岐町防災サークルに所属する中学生達です。メンバーは居村咲希（いむら さき）さん、田中葉々美（たなか ななみ）さん、前原和奏（まえはら わかな）さん、和田悠希（わだ ゆうき）さん、元木紀（もとぎ はじめ）さんの5人です。

今まで牟岐町防災サークルで活動をしてきて、一番印象に残った活動は何ですかと質問すると、多くの人が、徳島県立海部病院周辺で実施した防災デイキャンプと答えてくれました。和田さんは「病院の広場で、みんなで炊き出しをしたり、ブルーシートでテントを作ったりしたことが

■ 中学生達から高齢者への想い

その後も様々な質問を投げかけていく中で、みなさんに共通することがありました。それは「高齢者も僕らと一緒に生きていてほしい。」という想いです。

牟岐町の人に一番伝えたいことは何ですかという質問をした際、前原さんは以前町の高齢者の方にインタビューをしたときのことを教えてくれました。「年寄りやけん逃げない、という人が沢山いたので、まず



「いただきまーす！」

は高台に逃げて欲しいなっていうことを伝えたいです」と話してくれました。同じ質問に対して元木君は「高齢者の人達は津波がきても家におるといふ人もいるんですけど、全員逃げて欲しいなと思っています。やっぱり災害の中で死者が0（ゼロ）であって欲しいと心から思っています。」と話してくれました。

では、そんな諦めてしまっている高齢者の方に避難してもらうにはどうしたらいいと思うか。尋ねてみると、田中さんは「防災訓練の時からお年寄りの人にも参加してもらって、津波が起きたときもちゃんと逃げられるようにしてほしいです。」また、前原さんは「そのお年寄りの方にも大切な人がいると思うので、その人達のためにも生きて欲しいです。」とそれぞれ話してくれました。

死者がゼロであってほしい、お年寄りも諦めずに逃げて欲しい。牟岐で暮らす中学生達の高齢者の方達への想いが強く伝わってきました。
（山岡 美里）



左が元木君、右が久君。



牟岐町防災サークルでの活動写真

■ 牟岐町のような町でも

久君は「担架を自作し防災サークルの活動で参加者に体験してもらおう。」「実際に被害にあった方を助ける体験をしたい。」「防災サークルの活動を牟岐町だけでなく徳島県全体に広め、各地を訪問して活動したい。」と今後の活動や夢について話してくれました。

牟岐町のような小さな町だからこそ防災について頑張って活動している中学生がいるというのはとても重要だと思います。彼らの活動をより多くの人に知ってもらえれば、町全体の防災意識や災害に対する結束力を高めることができます。災害というのは頻繁には起こらないので、普段気にすることはほとんどありませんが、実際起きたときの事を考えると恐ろしいものです。これまでの当たり前前の生活が失われ、大切なものを失うかもしれません。

私たちも取材をされていて地震への対策が不十分だという事に気が付かされました。

災害は忘れたころにやってきます。そのためにも準備が必要なのです。
（井原 明彦）



久京聖君
牟岐町防災サークルで子どもたちのリーダー的存在。中学3年生。

第3回

インタビュー
2020/9/20

牟岐町防災
サークルの
中学生の皆さんに

は高台に逃げて欲しいなっていうことを伝えたいです」と話してくれました。同じ質問に対して元木君は「高齢者の人達は津波がきても家におるといふ人もいるんですけど、全員逃げて欲しいなと思っています。やっぱり災害の中で死者が0（ゼロ）であって欲しいと心から思っています。」と話してくれました。



前列右から居村咲希さん、前原和奏さん、和田悠希さん、田中葉々美さん、後列右が元木紀さん。牟岐町防災サークルで上田先生（後列右から2番目）や久君（同3番目）とともに活動をしている中学生。

Column

災害に慣れる

近年は異常気象による災害が毎年のように起こっている。そして、そういった現場で聞かれるセリフが「こんな災害、生まれて初めてです。」災害が多すぎて定番になりつつあるこのセリフだが、これは災害の多さ故に災害に慣れてしまった今の日本人を、そのまま表したもののなにかもしい。

私の実体験を話そう。私の実家は徳島の山間部の方なのだが、台風の後は落石や小規模の土砂崩れが発生しているのが普通だった。しかし、ある年の台風で道が崩れるという被害を受けた。生

まれて初めての体験でその時はかなりの衝撃を受けた。そして、数年後再び道が崩れた。その時私は「またか。」と感じた。私は道が崩れるという被害に慣れてしまったのである。このような慣れが避難をすることを妨げ、被害を大きくする一つの要因であろう。

これからは災害時や災害が起こる前に避難することに慣れていかなければならない。日頃から避難に慣れておけば、地震のような突然の大災害にも対応できるのではないだろうか。

（野田 康介）